

スポーツの楽しさの認知と過去のスポーツ経験の 関連性に関する研究

鳥取大学教育学部 福 元 和 行
山口大学教育学部 遠 藤 勝 恵

A Study on the Relationship between Recognition of Pleasure in Sport and Past Sports Experiences

Kazuyuki FUKUMOTO*, Katsue ENDO**

I 研究目的

地域スポーツ経営の最大の課題である地域住民の運動生活の充実のための基礎資料を得るために、これまで地域住民のスポーツの実施状況やスポーツ・クラブの参加状況を規定する要因の分析を行ってきたが、スポーツの実施・継続についてはスポーツに対する積極的態度和肯定的な価値観の存在が必要であり、この面の検討も重要である。

態度とは、一般的には、後天的に形成された一定の対象についての心構えであり、価値判断を含んだ行動の傾向¹⁾である。そして、認知的成分、感情的成分、行動的成分の三つの成分から構成されている²⁾。これら三つの成分は、その方向と程度、複合の度合において、相互に一貫する傾向を示し、一つの態度は、それと類似の対象に対する態度と群を作り、それらの群内の態度間には、協和的關係を保つ傾向があり、これらの態度群が集まって、その個人の態度配置ができる³⁾。そのため、人間の行動に密接に結びついている態度の感情成分の、正の感情はその対象への接近傾向を、負の感情は回避傾向を生じさせる⁴⁾、とされている。また、態度を感情的成分のみにより構成され则认为るフィッシュバイン⁵⁾を支持する研究⁶⁾も存在しており、スポーツ行動を規定する態度の研究において感情は重要な位置を占めている。

本研究ではスポーツ行動を規定する要因である態度の構成成分の中から感情成分の中⁷⁾の「スポーツの楽しさの認知」を従属変数として取り上げた。勿論、人間の行動は態度に規定されるだけでなく、その場の社会的状況のような外的要因から直接規定されている⁸⁾ため、態度と行動の不一致はしばしば起こることであるが、スポーツの楽しさの認知は、徳永他⁹⁾、金崎他¹⁰⁾、山口他¹¹⁾の研究

* Department of Physical Education, Faculty of Education, Tottori University

** Department of Physical Education, Faculty of Education, Yamaguchi University

に見られるようにスポーツ活動の実施・継続の支えとなると考えられるため、楽しさの認知に影響する要因の理解は重要である。

そこで、過去のスポーツ経験及びそれに伴う認知的側面とスポーツの楽しさの認知との関連を検討することにより、いつ頃の、どのようなスポーツ経験及び認知が、現在のスポーツの楽しさの認知と関連が深いかを探ろうとした。

II 研究方法

1 データの収集

本研究では山口県教育委員会が1988年12月12日から1989年1月20日にかけて郵送法により県内の56市町村から人口の比率に基づき収集したデータ^{注1)}の中から、男子141名、女子134名の合計275名分を採用し分析を行った。標本の構成は表-1の通りである。

表-1 標本の構成

		男子		女子	
		N	%	N	%
1. 年齢	20才代	36	25.7	25	18.8
	30才代	46	32.9	53	39.8
	40才代	38	27.1	36	27.1
	50才代	12	8.6	16	12.0
	60才以上	8	5.7	3	2.3
2. 結婚	未婚	27	19.3	11	8.2
	既婚	111	79.3	121	90.3
	死離別	2	1.4	2	1.5
3. 末子年齢	子供いない	27	20.3	16	12.3
	就学前	43	32.3	29	22.3
	小・中学生	35	26.3	43	33.1
	高・大学生	16	12.0	14	18.5
	就職	12	9.0	18	13.8
4. 職業	農林漁業	3	2.2		
	商業	12	8.9		
	事務職	40	29.6		
	専門管理職	9	6.7		
	土木・建設	16	11.9		
	公務員	9	6.7		
	男子				
	女子			9	7.3
				49	39.5
				66	53.2
5. 居住地区	商・工業地区	10	7.3	8	6.2
	住宅地区	56	40.9	66	51.2
	農山漁村地区	71	51.8	55	42.6

6. 通勤時間	15分未満	72	51.1	44	35.5
	15分以上30分未満	27	19.1	22	17.7
	30分以上	26	18.4	3	2.4
	通勤していない	16	11.3	55	44.4
7. 平日の自由時間	3時間未満	64	45.7	60	45.8
	3時間以上4時間未満	42	30.0	32	24.4
	4時間以上5時間未満	19	13.6	17	13.0
	5時間以上	15	10.7	22	16.8
8. 休日の自由時間	4時間未満	26	18.6	53	41.7
	4時間以上7時間未満	39	27.9	47	37.0
	7時間以上10時間未満	32	22.9	15	11.8
	10時間以上	43	30.7	12	9.4

調査内容は山口県教育委員会が実施した「山口県民のスポーツに関する調査」の調査内容の中から個人的属性に関して9項目、スポーツ経験に関して40項目そして目的変数に関して1項目の合計50項目を採用し、分析の対象とした。なお、目的変数であるスポーツの楽しさの認知状況の測定のための調査項目の内容は「スポーツを継続して実施するとした場合、楽しいことがありますか」である。また、スポーツ経験についての調査は小学校時代より調査実施時期までを調査対象期間とした。

2 データの分析

スポーツの楽しさの認知状況と各変数との関係を探るため χ^2 検定を行ったが、有意差の見られる 2×3 以上の分割表を使用した変数については、残差分析も行った。

なお、スポーツの楽しさの認知状況及びスポーツ経験に関する調査項目は、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までのリッカート尺度の4段階評定で構成されていたが、スポーツ経験については「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」を「あてはまる」に、また「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」に統合し直し、解析した。

また、スポーツの楽しさの認知状況については、「非常にあてはまる」を「あてはまる」に、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」に統合し直し、解析した。

III 結果及び考察

1 スポーツの楽しさの認知状況と説明変数のクロス集計結果

(1) 個人的属性

表-2は男子における目的変数(スポーツの楽しさの認知状況)と年齢の関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、年齢別のスポーツの楽しさの認知に差が見られたため残差分析を行った結果、50才代の人に1%水準の有意差が見られるため、スポーツの楽しさを認知している人は若

い人に多い、と考えられる。

表-2 目的変数と年齢のクロス集計結果（男子）

目的変数	I	II	III	IV
スポーツは楽しい	88.9	84.8	89.5	55.0
スポーツは楽しくない	11.1	15.2	10.5	45.0
	(N=36)	(N=46)	(N=38)	(N=20)
I : 20才代 III : 40才代	II : 30才代 IV : 50才以上	χ^2 値=13.140		** p<.01

表-3は男子における目的変数と平日の自由時間の関連を見たものであるが、有意差が見られるため残差分析を行った結果、スポーツの楽しさを認知している人は平日の自由時間が3時間以上4時間未満の人（1%水準）に多く、4時間以上の人（5%水準）では少ないと解釈できる。

表-3 目的変数と平日の自由時間のクロス集計結果（男子）

目的変数	I	II	III
スポーツは楽しい	81.3	95.2	67.6
スポーツは楽しくない	18.8	4.8	32.4
	(N=64)	(N=42)	(N=34)
I : 3時間分未満 III : 4時間以上	II : 3時間以上4時間未満	χ^2 値=19.816	** p<.01

表-4は男子における目的変数と休日の自由時間の関連を見たものである。有意差が認められたため残差分析を行ったが、休日の自由時間が4時間以上7時間未満の人にスポーツの楽しさを認知している人が有意に多く（5%水準）、有意傾向が認められた休日の自由時間が4時間未満の人では少ない、と言える。

表-4 目的変数と休日の自由時間のクロス集計結果（男子）

目的変数	I	II	III	IV
スポーツは楽しい	69.2	94.9	90.6	72.1
スポーツは楽しくない	30.8	5.1	9.4	27.9
	(N=26)	(N=39)	(N=32)	(N=43)
I : 4時間分未満 III : 7時間以上10時間未満	II : 4時間以上7時間未満 IV : 10時間以上	χ^2 値=11.793	** p<.01	

(2) スポーツ経験

① 小学校時代のスポーツ経験

表-5は小学校時代のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものであるが、 χ^2 検定の結果、男子7変数、女子6変数について有意差が認められた。 ϕ 係数を見ると、男子の方では係数.3以上の値を示した変数に「小学校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」「健康に役立った」の3変数があるが「仲間づくりに役立った」に中程度の連関が見られる。

表-5 目的変数と小学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

説明変数	男子			女子		
	χ^2 値	P	ϕ 係数	χ^2 値	P	ϕ 係数
休日などに自由に運動した	11.129	***	.281			
地域のスポーツ大会などによく参加した	6.343	*	.213	16.884	***	.355
楽しかった	12.198	***	.294	10.656	**	.282
充実していた	5.223	*	.192	12.970	***	.313
健康に役立った	15.224	***	.329	9.057	**	.261
仲間づくりに役だった	26.340	***	.432	7.099	**	.231
よい思い出がある	15.429	***	.336	11.400	***	.298

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

女子の方で、3以上の値を示したのは「小学校時代に地域のスポーツ大会などによく参加した」「充実していた」の2変数である。

なお、スポーツ・クラブ所属経験には有意差が認められなかった。

② 中学校時代のスポーツ経験

表-6は中学校時代のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、男子8変数、女子8変数に有意差が認められた。 ϕ 係数.3以上の変数は男子で「中学校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」の2変数、女子の方では「中学

表-6 目的変数と中学校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

説明変数	男子			女子		
	χ^2 値	P	ϕ 係数	χ^2 値	P	ϕ 係数
スポーツ・クラブに所属した	9.392	**	.258	8.876	**	.257
休日などに自由に運動した	7.433	**	.230	6.920	**	.229
地域のスポーツ大会などによく参加した	6.685	**	.218	20.241	***	.389
楽しかった	9.685	**	.262	15.841	***	.344
充実していた	8.112	**	.240	13.930	***	.322
健康に役立った	11.990	***	.292	7.652	**	.239
仲間づくりに役だった	20.056	***	.377	14.755	***	.333
よい思い出がある	14.958	***	.3136	15.476	***	.350

*** p<.001 ** p<.01

時代に地域のスポーツ大会などによく参加した」「よい思い出がある」「楽しかった」「仲間づくりに役立った」「充実していた」の5変数であった。

③ 高校時代のスポーツ経験

表一七は高校時代のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものであるが、 χ^2 検定の結果、男子8変数、女子8変数に有意差が認められた。 ϕ 係数. 3以上の変数は男子で「高校時代のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」「楽しかった」「健康に役立った」「休日などに自由に運動した」の5変数であるが、「仲間づくりに役立った」の変数は中程度の連関とはいえず、.510という、高校時代のスポーツ経験関連変数群の中では傑出した値を示した。

女子の方では ϕ 係数. 3以上の値を示した変数は見られなかった。

表一七 目的変数と高校時代のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

説明変数	男子			女子		
	χ^2 値	P	ϕ 係数	χ^2 値	P	ϕ 係数
スポーツ・クラブに所属した	7.012	**	.223	5.752	*	.207
休日などに自由に運動した	14.951	***	.326	5.904	*	.211
地域のスポーツ大会などによく参加した	6.700	**	.218	9.486	**	.267
楽しかった	19.978	***	.376	8.469	**	.251
充実していた	12.653	***	.230	10.776	***	.284
健康に役立った	16.101	***	.338	9.499	**	.266
仲間づくりに役だった	36.652	***	.510	11.585	***	.294
よい思い出がある	20.405	***	.385	9.176	**	.265

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

④ 19才～22才のスポーツ経験

表一八は19才～22才のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものである。 χ^2 検定の結果、男子8変数、女子8変数に有意差が認められた。 ϕ 係数. 3以上の変数は男子で「19才～22才のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」「健康に役立った」「楽しかった」「休日などに自由に運動した」「スポーツ・クラブに所属した」「充実していた」の7変数であったが、「仲間づくりに役立った」の変数には中程度の連関が見られた。

表一八 目的変数と19才～22才のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

説明変数	男子			女子		
	χ^2 値	P	ϕ 係数	χ^2 値	P	ϕ 係数
スポーツ・クラブに所属した	12.287	***	.307	5.054	*	.198
休日などに自由に運動した	12.488	***	.310	6.990	**	.233
地域のスポーツ大会などによく参加した	7.376	**	.237	8.198	**	.251
楽しかった	15.514	***	.347	17.004	***	.364
充実していた	11.722	***	.303	10.239	**	.283
健康に役立った	18.813	***	.380	10.239	**	.283
仲間づくりに役だった	26.107	***	.448	13.083	***	.320
よい思い出がある	18.469	***	.381	12.488	***	.317

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

女子では「楽しかった」「仲間づくりに役立った」「よい思い出がある」の3変数が、3以上の値を示した。

⑤ 23才以降のスポーツ経験

表-9は23才以降のスポーツ経験と目的変数との関連を見ようとしたものであるが、 χ^2 検定の結果、男子8変数、女子8変数に有意差が認められた。 ϕ 係数、3以上の変数は男子で「23才以降のスポーツ経験にはよい思い出がある」「仲間づくりに役立った」「健康に役立った」「楽しかった」「休日などに自由に運動した」「充実していた」「スポーツ・クラブに所属した」の7変数であるが、「よい思い出がある」は ϕ 係数、.548という男子の全時代の全説明変数の中での最大の値を示した。また、「仲間づくりに役立った」「健康に役立った」「楽しかった」の3変数の ϕ 係数は、4以上の値を示し、中程度の連関が見られた。

表-9 目的変数と23才以降のスポーツ経験関連変数のクロス集計結果

説明変数	男子			女子			
	χ^2 値	P	ϕ 係数	χ^2 値	P	ϕ 係数	
23才以降のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	14.951	***	.326	16.635	***	.356
	休日などに自由に運動した	22.552	***	.399	17.966	***	.370
	地域のスポーツ大会などによく参加した	12.407	***	.298	13.546	***	.322
	楽しかった	31.030	***	.469	29.419	***	.474
	充実していた	15.255	***	.329	30.918	***	.486
	健康に役立った	32.918	***	.483	27.760	***	.418
	仲間づくりに役だった	35.104	***	.499	32.360	***	.499
	よい思い出がある	41.377	***	.548	25.660	***	.451

*** p<.001

女子では「23才以降のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」「充実していた」「楽しかった」「よい思い出がある」「健康に役立った」「休日に自由に運動した」「スポーツ・クラブに所属した」「地域のスポーツ大会などによく参加した」の8変数が ϕ 係数、3以上の値を示したが、「仲間づくりに役立った」の変数は、.499という女子の全時代の全変数の中での最大の値を示した。また、「充実していた」「楽しかった」「よい思い出がある」「健康に役立った」の4変数の ϕ 係数は、4以上の値を示し、中程度の連関が見られた。

以上は各時代別のスポーツ経験とスポーツの楽しさの認知状況の関連についての分析結果であるが、 χ^2 検定による分析結果では、男女とも小学校時代のスポーツ経験関連変数に有意差の見られる変数が少し少ないものの、各時代で有意差の認められた変数の数にはあまり差がないと考える。

しかし、 ϕ 係数、3以上の変数の数の比較では、男女差が見られる。学生時代のスポーツ経験では全般的に見ると、女子よりも男子が上回っているが、中学校時代では女子が5変数であり男子を上回っている。高校時代のスポーツ経験関連変数の中に ϕ 係数、3以上の変数が見られなかったこと、及び小学校時代が2変数であったことを考慮すると、女子の学生時代のスポーツ経験の中では中学校時代のスポーツ経験が最も大きな影響力を持っていることを示唆するもの、と考える。

男子の方では学生時代のどの時代区分においても ϕ 係数、3以上の変数が存在するが、女子と異なり高校時代のスポーツ経験の連関の強さが目立っている。

全時代を通しての ϕ 係数。3以上の変数の数の比較では、男女とも23才以降のスポーツ経験が最高であり、スポーツの楽しさの認知に対して最も大きな影響力を持っていると考えられるが、男子の場合、時代区分が下がるにしたがって楽しさ認知に対する影響力が低下していくと考えられる。一方、女子の場合、男子ほど明確な低下傾向は見い出せないが、中学校時代のスポーツ経験の重要性が指摘出来る。

個別の変数の連関では男子の場合、「スポーツ経験は仲間づくりに役立った」が傑出した連関性を見せており、小学校、高校、19才～22才、23才以降の各時代区分において ϕ 係数。4以上の値を示した。また、「よい思い出がある」は23才以降で ϕ 係数。548という全時代区分の全変数の中での最高の値を示したが、他の時代区分でもすべて。3以上の値を示しており、他の変数と比較して相対的に連関の強さが目立っている。「楽しかった」「健康に役立った」は23才以降で ϕ 係数。4以上という中程度の連関の強さを示す値を示したが、前者は高校、19才～22才で。3以上の値を、後者は小学校、高校、19才～22才で。3以上の値を示しており、前2者と比較すると弱いながらもスポーツの楽しさの認知に関連性のある変数である、と考えられる。

女子では「23才以降のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」が全時代区分の全変数の中での最高の値である ϕ 係数。499を示したが、中学校、19才～22才の時代区分でも。3以上の値を示している。また、23歳以降の「充実していた」「楽しかった」「よい思い出がある」「健康に役立った」の4変数は。4以上の数値を示したが、「楽しかった」は高校時代を除いた各時代区分で。3以上の値を示し、スポーツの楽しさの認知と関連した変数であると考えられる。そして、残りの3変数は ϕ 係数。3以上が各時代区分で比較的に見られるため、相対的に多少弱いながらも関連のある変数である、と考える。

2 スポーツの楽しさの認知状況と説明変数の偏相関

表-10はスポーツの楽しさの認知状況とすべての説明変数との偏相関を示したものである。

表-10 目的変数と全説明変数との偏相関

説明変数	男子		女子		
	偏相関係数	変数中の順位	偏相関係数	変数中の順位	
個人的属性	年令	.126	16	.284	2
	末子年令	.124	17	.349	1
	職業			.187	12
	通勤時間	.209	6	.193	11
	平日の自由時間	.222	5	.224	7
	休日の自由時間	.281	1	.227	6
小学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.127	15		
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.129	14		
	充実していた	.174	9		
	仲間づくりに役だった	.224	4	.152	19
中学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.104	20		
	地域のスポーツ大会などによく参加した			.252	3
	楽しかった			.187	13
	充実していた			.216	9
	健康に役立った			.236	5
	仲間づくりに役だった			.160	18
よい思い出がある			.171	17	

高校時代の スポーツ 経験	楽しかった			.175	16
	健康に役立った			.186	14
	仲間づくりに役だった	.174	8		
	よい思い出がある	.108	19		
19才～22才 のスポーツ 経験	地域のスポーツ大会などによく参加した	.135	11		
	仲間づくりに役だった	.134	12		
23才以降の スポーツ 経験	休日などに自由に運動した	.113	18		
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.172	10	.250	4
	楽しかった			.221	8
	充実していた	.179	7	.186	15
	健康に役立った	.273	2	.143	20
	仲間づくりに役だった	.133	13	.198	10
	よい思い出がある	.234	3		

(注) 順位はすべての変数(48変数)中の順位であるが、21位以下は省略した。

偏相関係数の大きさにより順位をつけた場合の上位10位以内の内訳は、男子では23才以降のスポーツ経験4個、個人的属性3個、小学校時代のスポーツ経験2個、高校時代のスポーツ経験1個である。また、女子では個人的属性4個、中学校時代のスポーツ経験3個、23才以降のスポーツ経験3個である。さらに、20位以内の内訳は男子で23才以降のスポーツ経験6個、個人的属性5個、小学校時代のスポーツ経験4個、高校時代のスポーツ経験2個、19才～22才のスポーツ経験2個、中学校時代のスポーツ経験1個であり、女子では個人的属性6個、中学校時代のスポーツ経験6個、23才以降のスポーツ経験5個、高校時代のスポーツ経験2個、小学校時代のスポーツ経験1個である。

10位以内を見ると個人的属性は男子で2位、女子で1位となっているが、いずれも5個に達していない。「スポーツの実施」「スポーツ・クラブへの参加」という具体的スポーツ行動においては男女とも個人的属性関連変数が上位10位以内の過半数、あるいは半分程度を占めている^{12～15)}ので、スポーツの楽しさの認知という認知面に対する個人的属性の影響は具体的なスポーツ行動に対してほど強くないと考えるが、この傾向は20位以内では男子の方に特に強く表れている。

表-11はスポーツの楽しさの認知状況とスポーツ関連変数との偏相関を示したものである。

偏相関係数の大きさにより順位をつけた場合の上位10位以内の内訳は、男子では23才以降のスポーツ経験5個、小学校時代のスポーツ経験2個、19才～22才のスポーツ経験2個、高校時代のスポーツ経験1個である。また、女子では中学校時代のスポーツ経験4個、23才以降のスポーツ経験4個、高校時代のスポーツ経験2個である。さらに、15位以内の内訳は、男子で23才以降のスポーツ経験6個、小学校時代のスポーツ経験4個、19才～22才のスポーツ経験2個、高校時代のスポーツ経験2個、中学校時代のスポーツ経験1個であり、女子は中学校時代のスポーツ経験6個、23才以降のスポーツ経験5個、高校時代のスポーツ経験3個、小学校時代のスポーツ経験1個となっている。

各時代区分で見ると、23才以降のスポーツ経験は男子で1位、女子で2位となっているが、「スポーツの実施」や「スポーツ・クラブへの参加」の規定要因の分析では常に上位にランクされていた変数群であり、スポーツの楽しさの認知に男女とも関連の深い変数であると考えられる。

学生時代のスポーツ経験では、小学校時代のスポーツ経験は男子で2位であるが、女子では13位

表-11 目的変数とスポーツ経験関連変数との偏相関

説明変数	男子		女子		
	偏相関係数	変数中の順位	偏相関係数	変数中の順位	
小学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.127	12		
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.129	11		
	充実していた	.174	6		
	仲間づくりに役だった	.224	3	.152	13
中学校時代のスポーツ経験	スポーツ・クラブに所属した	.104	15		
	地域のスポーツ大会などによく参加した			.252	1
	楽しかった			.187	7
	充実していた			.216	5
	健康に役立った			.236	3
	仲間づくりに役だった			.160	12
	よい思い出がある			.171	11
高校時代のスポーツ経験	地域のスポーツ大会などによく参加した			.131	15
	楽しかった			.175	10
	健康に役立った			.186	8
	仲間づくりに役だった	.174	5		
	よい思い出がある	.108	14		
19才～22才のスポーツ経験	地域のスポーツ大会などによく参加した	.135	8		
	仲間づくりに役だった	.134	9		
23才以降のスポーツ経験	休日などに自由に運動した	.113	13		
	地域のスポーツ大会などによく参加した	.172	7	.250	2
	楽しかった			.221	4
	充実していた	.179	4	.186	9
	健康に役立った	.273	1	.143	14
	仲間づくりに役だった	.133	10	.198	6
	よい思い出がある	.234	2		

(注) 順位はスポーツ経験関連変数(40変数)中の順位であるが、16位以下は省略した。

に「仲間づくりに役立った」が入っているだけである。一方、中学校時代のスポーツ経験は男子では最下位、女子では1位にランクされており、学生時代のスポーツ経験の中でもスポーツの楽しさの認知に最も関連する時代には男女差が見られる。また、高校時代のスポーツ経験は男子で4位となっているが、 χ^2 検定では有意差の見られなかった女子でも3位に入っているため、変数の順位及び15位以内の変数の数より、男女に同程度に関連している変数である、と考える。

19才～22才のスポーツ経験は15位以内の変数の数の上からは男子で3位であるが、2個がそれぞれ8位、9位に入っており、関連性が伺われるのに対して、女子の方では15位以内の変数が存在せ

ず、男女差が表れている。

個々の変数の10位以内の順位を見ると「スポーツ経験は仲間づくりに役立った」という変数が男子で3位、5位、9位、10位に入っており、スポーツの楽しさの認知に深い関わりのあることが推測できるが、女子では6位に入っているのみであり、男子の認知の方に関連の深い変数であることがわかる。

「楽しかった」という変数は男子では15位以内にも見あたらないが、女子では4位、7位、10位にランクされている。通常、スポーツ活動中の楽しさ体験がスポーツの楽しさに対する認知を育てると考えられるが、この予測は女子には該当しても、男子には当てはまらないという分析結果になっている。

「地域のスポーツ大会などによく参加した」という変数は男子で7位、8位、女子で1位、2位にランクされている。上記の「楽しかった」という変数の男女差の問題の究明はここでは行わないが、プレイ論からすれば楽しいからスポーツするのであるから、プログラム・サービスに対応して活動する人とスポーツの楽しさの認知が関連が高いのは当然である。

「充実していた」という変数は男子で4位、6位、女子で5位、9位にランクされており、男女に共通して関連のある変数であると考えられる。また、「健康に役立った」という変数は男子で1位、女子で3位、8位にランクされ、「よい思い出がある」は男子で2位があるが、女子では10位以内に入っていない。

「スポーツ・クラブに所属したことがある」という変数は「スポーツ・クラブへの加入状況」や「スポーツの実施状況」の分析では上位にランクされる変数であるが、男子で12位、15位、女子では15位以内に見あらず、具体的スポーツ行動に対して示したほどの大きな影響力をスポーツの楽しさの認知に対しては持たないと考える。

IV 要 約

本研究では過去のスポーツ経験及びそれに伴う認知的側面とスポーツの楽しさの認知との関連を検討することにより、いつ頃の、どのようなスポーツ経験及び認知が、現在のスポーツの楽しさの認知と関連が深いかを探ろうとしたが、結果は以下のように要約できる。

- 1 χ^2 検定の結果では男女とも有意水準の違いはあるものの、すべての時代区分のすべての変数に、有意差が認められた。 ϕ 係数の比較では男女とも23才以降のスポーツ経験が最も関連が高かった。学生時代のスポーツ経験では全般的に見た場合、男子の方に数値の高い変数が多いが、中学校時代では女子に連関性の高い変数が多く見られる。また、男子では高校時代のスポーツ経験の連関の強さが目立っている。

男子の個別の変数では「スポーツ経験は仲間づくりに役立った」が傑出した連関性を見せた。また、「よい思い出がある」「楽しかった」「健康に役立った」の変数にも連関性が見られた。

女子の個別の変数では「23才以降のスポーツ経験は仲間づくりに役立った」という変数が最大の連関を見せたが、「充実していた」「楽しかった」「よい思い出がある」「健康に役立った」の各変数にも連関が見られた。

- 2 スポーツの楽しさの認知状況とすべての変数の偏相関係数による分析では、個人的属性は男子でも女子でも上位に位置し影響力を持つが、具体的なスポーツ行動に対して示したほどの大きな

影響力は持たないと考えられる。

スポーツの楽しさの認知状況とスポーツ関連変数の偏相関係数による分析では、男子では23才以降のスポーツ経験、女子では中学校時代のスポーツ経験が1位であった。

個別の変数では「スポーツ経験は仲間づくりに役立った」の連関が男子では高く、女子では「地域のスポーツ大会によく参加した」「楽しかった」が高い連関性を示している。また、「充実していた」は男女に共通して関連のある変数と考えられる。

本研究では山口県教育委員会のご理解を得て、調査データを使用させて頂いた。ここに記して謝意を表する次第である。

注

この調査は山口県教育委員会の依頼により山口大学教育学部岡村豊太郎、遠藤勝恵の両氏がフィッシュベインの「行動意図予測モデル」などを参考にしながら作成した調査票を使って行われた。

引用・参考文献

- 1) 新修体育大辞典, 不昧堂出版, 1976, p.939
- 2) 教育・臨床心理学辞典, 北大路書房, 1980, p.267
- 3) 原岡一馬:『態度変容の社会心理学』, 金子書房, 1977, p.9
- 4) 安藤清志:「態度と態度変化」, 古畑和孝編,『人間関係の社会心理学』, サイエンス社, 1981, p.66
- 5) 前掲書2, p.229
- 6) 徳永幹雄・多々野秀雄他:「スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究ーランニング実施に対するFishbeinの行動予測式の適用ー」, 体育学研究, 第25巻, 第3号, pp.179~190, 1980
- 7) 徳永幹雄・橋本公雄:「身体運動に対する態度と行動に関する研究ー男女・年代別の比較ー」, 健康科学, 第1巻, pp.129~139, 1979
- 8) Leon, Man:「Social Psychology」, Champion,R,A編,『Basic Topics in Psychology』, John,Wiley&Sons, 1969, (立花義道訳『社会心理学』, 誠信書房, 1974, p.162)
- 9) 徳永幹雄・橋本公雄他:「身体運動に対する態度の構造と運動の関係についての研究」, 九州大学体育学研究, 第5巻, 第4号, pp.9~20, 1976
- 10) 金崎良三・厨義弘:「社会人のスポーツクラブ所属を規定する要因の分析」, 健康科学, 第2巻, pp.141~153, 1980
- 11) 山口雅子・山口泰雄:「性差から見た高齢者のスポーツへの社会化に関する研究」, 体育・スポーツ科学, 第3号, pp.23~32, 1994
- 12) 福元和行・遠藤勝恵:「地域スポーツ・クラブへの女子の参加を規定する要因の分析」, 山陰体育学研究, 第10号, pp.30~35, 1995
- 13) 福元和行・遠藤勝恵:「地域スポーツ・クラブへの男子の参加を規定する要因の分析」, 鳥取大学教育学部研究報告, 教育科学, 第37巻, 第2号, pp.263~271, 1995
- 14) 福元和行・遠藤勝恵:「地域社会における男子のスポーツの実施状況を規定する要因の分析」, 鳥取大学教育学部研究報告, 教育科学, 第37巻, 第2号, pp.273~282, 1995
- 15) 福元和行・遠藤勝恵:「地域社会における女子のスポーツの実施を規定する要因の分析」, 山陰体育学研究, 第11号, pp.11~18, 1996
- 16) 豊田直子・丹羽劭昭:「態度の認知的側面と感情的側面からみたスポーツに対する態度の検討」, 日本体育学会第41回大会号, p.189, 1990

- 17) 徳永幹雄・橋本公雄他：「スポーツ行動の予測因に関する研究(2)―心理的・身体的要因について―」, 健康科学, 第3巻, pp.72~85, 1981
- 18) 徳永幹雄・橋本公雄他：「学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1)―心理的・身体的要因について―」, 健康科学, 第4巻, pp.36~49, 1982
- 19) 徳永幹雄・松本寿吉他：「学生の体型・体力・性格と体育・スポーツに対する態度及び活動の関係」, 九州大学体育学研究, 第4巻, 第4号, pp.15~21, 1971
- 20) B.S, Everitt : 『The Analysis of Contingency Tables』, Champion and Hall, 1977 (山内光哉監訳『質的データの解析』, 新曜社, 1992)

(1996年4月19日受理)

